

日本科学哲学会シンポジウム

意思決定、合理性、学習

- A. ディスカッションテーマ、及び補足的提題 岡田光弘 慶応大
- B. 欲求独立な行為理由は実在するか 山田友幸 (北海道大学)
- C <https://groups.oist.jp/ja/ncu/systems-neurobiology-group> 銅谷賢治 (ゲスト提題者  
沖縄科学技術大学院大学 OIST 神経計算ユニット)
- D <http://www.tamagawa.ac.jp/teachers/sakagami/Publications.htm> 坂上雅道 (ゲスト  
提題者 玉川大学脳科学研究所)

## I 序論と本シンポジウムの目的

行動判断、意思決定の研究は様々な分野で行われている。本シンポジウムでは異なる分野の研究者たちが分野横断的に議論する。特に、行為の哲学、行動科学などにおいて議論されてきた、意思決定における合理性の問題などの伝統的観点に加えて、近年の神経科学的研究動向や動物を対象にした意思決定研究、計算機科学に端を発する学習モデル理論などの新しい観点も導入して議論することを試みる。この目的で二人のゲスト提題講演者をお招きしている。

## II. 本シンポジウムのディスカッション項目から。

本シンポジウムの持つ学際的な性格上、共通のディスカッションテーマを絞ることはせず、各提題者には各専門分野の立場から紹介、議論していただく形式をとる。コーディネートの観点からは特に次の点を考慮に入れて進めることとする。

行為の哲学で議論されてきた、欲求と信念の関係などに基づく合理的行為の批判的検討も重要であると考え。本シンポジウムでは言語行為論的立場からなされたサールらの欲求から独立な行為理由の理論を振り返ることを通じて、この点を議論する  
また近年、脳画像手法や動物実験により、神経科学的意思決定研究に大きな成果が上がりつつあり、ゲスト提題者に最新の成果の要点を簡単に紹介していただく。

意志決定とはなにか、行為の合理性とはなにか、といった基本的な点が各分野でどのように考えられているかについてもご意見をお聞きしたい。

動物の意思決定や選択的行動と人のそれとはどのような違いがあるか、また、両者を結ぶ神経科学的共通基盤があると考えられるかどうかについても議論したい。

大脳基底核で強化学習（機械学習モデルの一つ）の脳内計算がなされていることが報告され、これにより広い範囲の生物において、無意識的な意思決定が説明されるに至っている。さらにその後、熟慮的意思決定に関わる高次機能部位が解明されつつある。両者は神経科学においてしばしば、モデルフリー意思決定、モデルベース意思決定と区別される。この区別を哲学的意思決定論の文脈で検討したい。

人と動物の意思決定研究手法を比較する場合、言語使用の有無がどのように影響するかを考察することも有益であろう。この点に関してもいくつかの提題をしておきたい。例えば、命題的態度として欲求や信念や主観確率を取り扱う場合と確率的状態遷移として取り扱う場合を、このような文脈で比較してみたい。

行動経済学において1960年代以降提出されてきた所謂意思決定の非合理性・パラドクスは、期待効用理論や確率論などの合理性概念から人の行動がどのようにずれるかを実験行動科学的に明らかにしてきたが、これらを契機に合理性とはなにかということに新たな視点が現在も提案され続けている。この点についても時間が許せば本シンポジウムで触れてみたい。

---

-----要旨 -----

題目：欲求独立な行為理由は実在するか

山田友幸（北海道大学・哲学）

知性が知識や信念に基づいて、欲求（ないし情念）の奴隷として欲求実現の最善の手段を選択するという伝統的な合理性理解に反旗を翻したジョン・サールの議論では、欲求から独立の行為理由（**desire-independent reasons for acting**）が存在するという主張が大きな役割を果たしている。たとえば、約束したことを実行する義務は、当人が当該行為を実行する段階でそれを望んでいるか否かにかかわらず、当人にとって当該行為を実行する理由になるというのだが、これに対しては伝統的な合理性理論の支持者は、約束を破ることで信用を失いたくないという「欲求」等を持ち出して反論する。この論争は、事実から規

範が導けるかといった概念的な問題にもかかわりがあるが、同時に、サールが欲求から独立の行為理由とみなすような事柄が関係する場合とそうでない場合で、意思決定の脳内メカニズムに違いはあるのかといった問題や、動物の脳と人間の脳には違いはあるのかといった問題をも提起するように思われる。また、サールの合理性理解のもう一つの特徴は、欲求と信念に基づいていったん意志が決まれば、それが我々の行動を因果的に決定するという伝統的見方を否定し、意思決定と行動の間にはギャップがあり、意志を固めた後でも、当該の行為の実行の際に、我々が行動をその都度起こさなければならないということを認める点にある。これについても、脳内メカニズムの観点からはどのようなことが考えられるか興味深い。これらの問題について、可能ならば、脳科学者らからのご意見をうかがいながら考えたい。